

熱風

GHIBLI

スタジオジブリの好奇心

2022

3



《宵の口》— 安野モヨコ — 2022年

特集 コロナの収束

特集

コロナの収束

新型コロナウイルスによるパンデミックが始まって約2年ものの月日が経ちました。変異を繰り返すウイルスに対し、自然をコントロールすることは難しいという現実は見えてきました。が、何が大切で何を受け入れなければならないのかについての議論は進んでいないように思えます。オミクロン株は感染のピークは過ぎたようですが、また次の変異株が高確率で来るだろうと予測されています。どのようにコロナと向き合うのか、それを決めないと、また同じことが繰り返されるだけと考え、特集では感染症の専門家に、人はコロナとどう生きていくかについて意見を伺いました。長崎大学の山本太郎先生は、アフリカで感染症対策に従事されていた医師、医学博士です。

◇東京都内の新規感染者数と重症者数



2月19日、全国で、新型コロナウイルスに感染した人のうち、大阪府で31人、東京都で27人など計218人の死亡が報告された。東京都の死者数は過去最多で、全員が70代以上、半分以上が高齢者施設や病院などの施設内感染だった。全国の死者数は、2月に入り増加傾向が強まっている。2月17日は過去最多の271人の死亡が発表された。全国の感染者数は、2月19日、8万1699人が報告された。東京都は、1万3516人で、11日ぶりに前の週の同じ曜日を上回った

医学博士 山本太郎 インタビュー

「人間が生物の一部である限り、新しい感染症は常に出てくる」

終わりの始まり

編集部(以下——) いまオミクロン株がすごい勢いで感染拡大しています。感染の波は第6波まで来ていますが、既に2年間もアップダウンの繰り返しで、毎回医療体制が逼迫。毎度毎度こんな状況で、いったい政府は何をやっているだと思ってる人も多いと思います。今回のオミクロン株を見ると、ウイルスが弱毒化してきた、もうそろそろ普通の風邪になると言う人もいますが。

山本太郎(以下山本) オミクロン株は、明らかに感染力が強くなる一方弱毒化して、僕自身は収束に向けた終わりの始まりが起きているのかなと思っています。おそらく10年後には明らかに、感染しても軽症ですむ、いわゆる「風邪コロナ」に変わっているでしょう。ただ、収束するかどうかで明確な基準があるわけではなくて、皆が収束したと思うかどうかなんです。ちょっと難しいんですけど、例えば、今日夕方に雨が降る確率は30%だ、と予測するのは科学です。でもその30%という確率を聞いて、傘を持っていくかどうかを決めるのは個人個人の考えです。つまり、

感染力が弱くなった、これくらいの死亡率だと伝えるのは科学だけれど、ではそれを収束と見なすかどうかと決めるのは科学ではなく、皆のコンセンサスみたいなもの。そういうイメージなんだと思います。まだ日本はすごく厳しい制限、指標を使っていますよね。中国はもっと厳しいと思いますけれど、そんな状況なのかなと。

——なるほど。いま、先生は「収束に向けた終わりの始まり」とおっしゃいましたが、先生の中での収束の定義とはなんでしょうか。

山本 僕の中で収束というのは、二つあって。一つは実効再生産数というんですけど、一人の感染者から何人の人が感染したかという実効再生産数が1より下になるのが一つの収束の定義だと思います。もう一つはいま言ったように、このコロナウイルスが、自分たちにとって許容できるレベルの感染症になるかどうかです。

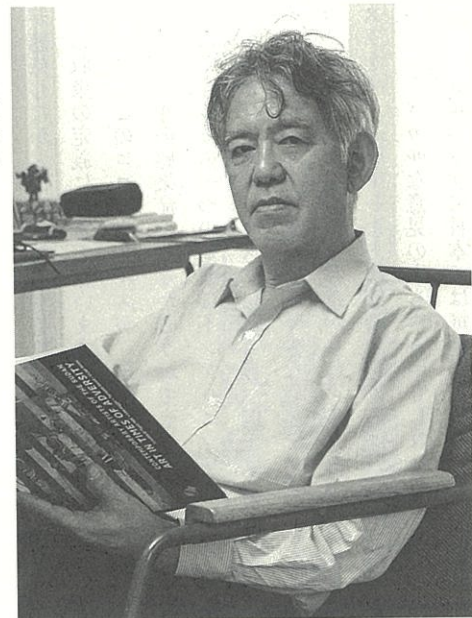
おそらくその一つの基準はインフルエンザだという気がしています。ただ、マスクにしても、例えばインフルエンザ感染者は去年と今年はすごく少ないんですよ、みんなコロナでマスクをしていましたからね。じゃあこれからもマスクをずっとしていた方が感染症対策にはいいじゃん、というラディカルな意見の人もいるかもしれない。

インフルエンザで日本では毎年1万人とか死亡者が出て

いたけれど、そこは許容できるの? と言われればまたそこは別の話で、許容できるかどうかは本人の考え方みたいなところがあります。

——2年前に最初にコロナが出てきたときに、当時の安倍首相は、これは戦いだ、いまは有事だ、コロナに打ち勝つ、ゼロコロナを目指そう、という強い決意を表明しました。あれから2年の月日が経って、コロナウイルスは人間の対策にあまり関係なく、感染者数は増減を繰り返しています。専門家ですらよく分からない部分がたくさんあって、私たちはそこから何を学んで、どう見方が変わってきたのでしょうか?

山本 変わってきているかどうかは分からないんですけど、たぶん新しい感染症が出てきたときに、最初のフェーズは、それをなくすというものだと思うんです。例えばコロナがポンと中国の武漢で最初に出て、ものすごく火が小さかったときには、それをガツと抑えてなくしてしまおうとする。だけれど、一旦それが広がってしまうと、もう消すことはできない。というのは、人間の対策に対するウイルスの変化のスピードは、ウイルスの方が遥かに速くて、人がいくら消そうと努力してもその努力は追いつけない。そういう意味では、ゼロコロナとか根絶を目指すというのは、あの時点の判断としてはほぼ難しいというか、無理が



山本太郎「やまとと・たろう」

1964年広島県生まれ。長崎大学医学部卒業。医師、博士（医学、国際保健学）。1990年、札幌市立札幌病院救急部シニエント。1995年、長崎大学大学院博士課程病理学系専攻修了（博士（医学））。1998年、東京大学大学院博士課程国際保健学専攻修了（博士（国際保健学））。1998年、長崎大学熱帯医学研究所助手。1999年、JICAシンバブエ感染症対策プロジェクトアドバイザー。2000年、京都大学大学院医学系研究科国際保健助教授。2002年、ハーバード大学公衆衛生大学院特別研究員（武見フェロー）。2003年、コネル大学公衆衛生大学院・客員助教授兼ハイチカボジ肉腫・日和見感染症研究所上級研究員。2004年、外務省国際保健協力局課長補佐（国際保健政策担当）。現在、長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授。著書に「疫病と人類 新しい感染症の時代をどう生きるか」（朝日新書）、「感染症と文明―共生への道―」（新型インフルエンザ世界がふるえる日）、「大震災のなかで 私たちは何をすべきか―分担執筆（岩波新書）」、「ハイチ いのちの闘い（昭和堂）」など多数。2007年武見奨励賞、2017年日本医師会第70回優功賞受賞。

くりいかないというのは、やっぱりどんな人か、どんな人たちなのかお互いに知らないから。だから時間が必要なんです。その間に我々はワクチンや治療薬の開発をしますけれど、でもワクチンや治療薬が開発されたからといって、コロナをゼロにできるわけではないんです。

いずれ穏やかな風邪のウイルスに

——そもそも、このコロナは「新型コロナウイルス」と呼ばれています。なぜ新型なのでしょう。新型ということとは、旧型コロナウイルスがあつたのでしょうか。

山本 新型というのは、ヒトにとつての新しいウイルスという意味なんです。というのも、新型ウイルス感染症というのは、これまでもここ20年、50年とかたびたび出ています。HIVもこの100年くらいの間に出てきたヒトにとつての新型ウイルスですし、エボラウイルスもヒトにとつての新型ウイルスなんです。

では、新型コロナウイルスとは何かというと、ヒトに感染するコロナウイルスはこれまで六種類知られていました。で、その六種類以外で、ヒトに感染するコロナウイルスが出てきたので、現在のものが新型コロナウイルスと呼ばれています。これまで知られていた六種類のうち、二つ

あつたという気がしますね。

もう一つ言うと、これまでも人類史ではウイルスによる感染者はたくさん出ています。野生動物からヒトに伝染してパンデミックを起こし、人間社会がある種の集団免疫を持つことによって、風邪のようなヒトと共存する感染症になつて社会に定着するプロセスを辿っているのですが、それを排除しようとすればするほど、ウイルスはどんどん変化をして、進化競争になります。つまり対策がどんどん難しくなるといえるか、根絶されないように変化をしていく。そういう意味でも安倍元首相の言つた「戦争」というのは間違つていた、無理があつたと思つています。

もう一つは「戦争だ」と言つたがゆえに、その言葉で社会が有事だと判断した。となると、戦争に勝つまでは我慢しなさいという、ひどく息苦しい社会になつてしまつた気がします。そうではなくて、どこかで我々は折り合いを見つけてウイルスと共存していく。おそらくウイルスは弱毒化の方向に行くだろうし、お互いを知るための時間が必要なんだと思えば、もつと違つた心持ちもあつたかなと思います。

よく私は転校生の比喩を出すのですが、転校生が入つてきたときに、転校生も、もともといた子たちも、最初から仲違いしようとは思つていないんです。だけど最初はしつ

は過去20年くらいに出てきたSARS、MERSで、残りの四つは、古くから、おそらく数百年、数千年前から人間社会にあつて、そのコロナウイルスは風邪の症状を起こすだけで重篤な症状を出すことはほぼありません。

——コロナウイルスつて数百年も前からあつたのですか。

山本 はい。それは我々が風邪をひいたときの症状によく似ていて、鼻水が出たり頭が痛い、なんだかちよつとだるいなということ、夏風邪だったりしますよね。インフルエンザみたいな風邪の20〜30%くらいはいわゆるヒトコロナで、コロナウイルスによつて引き起こされているとずっと推定されています。そうした四つのコロナウイルスというの、ある時点までは新型コロナウイルスだったわけですね。どこかの時点で人間社会にポーンとやつてきて、パンデミックを起こして、皆が免疫を獲得することによつて、普通の風邪のようなウイルスになっていきました。新型コロナウイルスの新型とはそういう意味の新型で、いずれ穏やかな風邪のウイルスになつていく。次に20〜30年後にヒトにとつて新しいコロナウイルスがまたポーンと出てくると、今度はそれが新型コロナウイルスになるというわけです。今回の新型コロナウイルスの正式な名称はSARSコロナウイルス2、二番目のSARSコロナウイルスという名前です。

——ということは、コロナはSARSの変化型ですか？

山本 変化型というか、いとこのようなものです。遺伝子を見ると、きょうだいか、いとこみたいな関係です。SARSの子どもというわけではなく、いとこ。でも一般的には新型コロナウイルスと呼ばれています。

——SARSの方が強毒でした。

山本 はい、SARSの方が強毒でしたよね。それゆえに中国中心の感染拡大は起こしたのだけれど根絶できた。あれもずっと続けばどこかで弱毒化していったんだろうと思いますけど、あまりにも強毒性のゆえに無くなつていく運命だったというか。

絶滅を目指す相手ではない

——いまみんなが願っているのは、どうやらコロナ根絶は難しいようなので、このまま順調に弱毒化していって、要するにただの風邪になつてくれればいい、ということだと思えます。いまおっしゃったように、ウイルスの特性からいつてコロナもそういう風になるのでしょうか？

山本 なると思います。ウイルスってなんか悪者のように見えるんですけど、それはなんて言うのかな……。そもそもウイルスという存在が初めて見つかったのが病原体と

す。もしウイルスがなかったらもつと違うカタチになつたのではと思います。

そういう意味でもウイルスというのは基本的なところで絶滅を目指す相手ではないし、根絶をすべき対象ではないと思うんですね。それが前提であつて、じゃあ、ヒトに感染して病気を発症させるウイルスはやつつけていいのかというと、そこも難しい。生態学的な考え方で言えば、そこに参加しているプレーヤーというのは、どんなプレーヤーもシステムの安定に一定の寄与をしていると考えるのが一般的です。ですから悪いことをしているというのは人の視点からだけであつて、全体から見るとシステムの安定に寄与している可能性があります。となると、ウイルスを根絶しようとするのではなく、我々が許容できる程度の毒性の中で一緒に生きていくという方が、おそらく良いんじゃないだろうか。

——先生の本『疫病と人類』の中で面白いなと思つたのが、HIVですら、もしかしたらヒトにとって何かの防御的な役割をしているのではないかという見解でした。

山本 もしHIVに罹つて、それが自分の中にあつて、病気を起こさないくらいに弱毒化したら、似たウイルスに罹りにくくなるということはあるんですね。あるいは罹つたウイルスが、進化の年代で何万年も何十万年も、人の身

してだったから悪いというイメージがあるのですが、ウイルス全体で見ると、この地球上にもものすごい数のウイルスがあつて、ヒトに病気を起こさせるのはその中の0.1%のまた100分の1、1000分の1くらいの単位だと思ふんですね。大半は何もしないか、むしろ宿主というウイルスが寄生する相手の生存に関して、それに貢献する役割を持つていると最近考えられています。というのも、ウイルスは寄生する相手がいないと自分単独での複製ができません。だから宿主が死んでしまうと、自分も生存できない。——ということは、ウイルスのメリットというのは寄生する相手の生存を担保する方向なんです。そういうことが最近考えられてきているし、長い進化の中、進化というのは両親から子どもが産まれてどんなある形質が伝わつていつて、徐々に積み重なつて変わつていくことですが、ときどきそれを越える大きな変化が起こることがあるんですね。それはおそらくウイルスとウイルスに近いものによつて駆動された。というのは、ウイルスは感染すると感染した相手の宿主の遺伝子を幾分か持つて外に出ることがあるんです。で、次の人に感染するとその遺伝子を渡す。それは小さな遺伝子の繋がりで起こすよりも遥かに大きな変化でして、だからヒトがいまのカタチであつたり、地球上の生物がいまのようなカタチであるのはウイルスがあつたからで

体の中で別のファンクションを働きかけることとかも。細胞と細胞をくつつけるウイルスが我々の身体の中にあるのですが、何百万年、何千万年前に、我々のどこかに感染したそのウイルスが内在化して我々の身体の中で細胞と細胞をくつつけて胎盤を作るといふ機能を発揮させるということから哺乳類はすごく生存に有利になつて、いまに至っています。

つまり長い目で見ればウイルスの存在なしにはいまの我々はないし、そういうことから考えれば、共存とか、共生とかということを目指していくもので、少なくとも根絶や戦い、戦争とかではないよねという考え方ができると思えます。これは自分が10年くらい前からずつと思つてきたことです。もう少し言うと、ここ20年くらいで社会も多様性をいろんな意味で受け入れようよと少しずつ変わつてきています。それはジェンダーでも性的指向性でも、もつと前で言えば国籍や肌の色とかを、優劣ではなく多様性として受け入れようという考え方がどんどん進んできています。その根本つて、自分と違うものがあつても排除しないことだと思ふんですね。

——つまり、人間だけではなくそれ以外の存在も。ウイルスは生物ですらありませんか？

山本 自分と違うものどう共存していくか。それを掂げ

ていくと、ヒト以外の生物種の多様性とか存在とかも重要だと考え始めているし、そこには微生物だって、ウイルスでも入ってきていいよねというのが根本的なところに入っている、自分と違うというところで排除するという考え方は止めようよと。

小さい物語をどう回収するか

——あえて反対の立場からの意見なんですけど、LGBTQとかは人間同士の問題です。それを多様性として受け入れていくのは賛成なんですけど、文明は自然をコントロールするところとところで発展してきました。こんな言い方はアレなんですけれど、人間が万物の頂点である、こういう見方はどうなんだろう？ 傲慢でしょうか？

山本 それは自然に対する一つの見方です。そのキリスト教的な見方というのはたぶんそうで、神は人を造って、人がちゃんと自然をコントロールするように、それによってちゃんと神に仕えなさいと命令していますよね。

——「創世記」で神は人間に、魚、鳥、地の上を這う生き物すべてを支配せよと言っていますね。

山本 ですからとくにキリスト教では、自然を制御するというのは人間の重要な役割だと考え、それをやってきたわ

けですよね。やってきた結果、いま我々がちょっと反省に入っているわけです。果たしてそれだけで良かったのか。どんどん生物が、人間活動によって第六の絶滅期、大絶滅期に入っています。人間活動の結果、温暖化をもたらして、我々の存在そのものに影響を与え始めている。その反省の上に立とうとしているわけです。もちろんそうじゃないという人もいますよね。

反省の上に立とうとしているときに、では反省して何をするかというと、人間の存在も重要なんだけれども、それは他の生物の存在によって担保されているというところから始めないと、自分の存在そのものを維持できないんじゃないかと、そういうことだと思っただけです。

——先生のおっしゃっていることは本当にそうだと思うんですけど、人間にとつてのウイルスとの共存というのは、過去の生命の歴史を考えても、それこそ35億年の話です。でもいま生きている人は「いや、とりあえずいまはオレやオレの家族の生きている100年くらいの間の話をしてくれよ」とか思ってしまう人も多いのではないかと思います。種としての人類ではなく、個としての一人一人の人間です。そこに人間だけが他の動物とは違う、人間たる所以もあるのではないかと。

山本 常に時間軸の話は重要で「そうはいっても1億年単

位の話をされてもね。オレは病気になって明日死ぬのは嫌だよ」と言う人はいるでしょう。そこはいつもせめぎ合いがあつて、我々が科学の進歩によって、一つ学んだことというのは、このままのことが続けば将来どうなるかということなんです。そこをある種予測することができるようになったわけですね。そこから遡って、じゃあいまは何をしなければいけないのか？ と考えることができるようになった。それは一つの大きな進歩で、だから例えば、いま地球という資源を使い果たさずに、持続可能な発展って何だろうって考えるときに、それはいまの我々だけではなくて、次世代、さらに次の世代に……1000年も2000

年もの先までは見通せないかもしれないけれど、少なくとも数世代先にバトンをちゃんと渡していこうという考え方が良だと思うんですね。そういう意味ではいまを乗り切れば良いという見方は短絡的だと思います。でもいろんな現場でそれを説得するのはなかなか難しいです。ある種それを説得してはいけない場面もあるかもしれませんが……。

——と、いいますと？

山本 うーん……、例えば僕はウイルスとの共生とか共存を考えているのだけれど、「先生、でも私のとっても大好きなおばあちゃんがコロナで亡くなっちゃったのよ」と言われたら、それに対して返す言葉がない。それは本当に残

念だったね、と言うしかなかった。そこは共存とか共生という話ではない、仕方ない犠牲なんだよ、という見方もすべきではない。でも一方で、共存、共生の中でそのちっちゃな物語をどう回収していくか、というのは誰か一人が答えを出せるわけではなくて、皆で一生懸命考えなくてはならないことなんです。

だから地球の温暖化とか、「だって嫌だよ、こんな生活からまた逆戻りするの。こんなに便利に快適になったのにさ」って、それはそうかもしれない。それは説得できるかもしれないけれども、その言葉は皆がそう思っていて、難しいんです。

もつと言うと、僕なんかがやっている国際保健なんかだと、「石油資源をガングラン燃やしてきたのは先進国でしょ？ こちらはいまでも電気や水に不自由していて、いま二酸化炭素排出を規制しろと言われても嫌だよ」というアフリカの人たちの声というのが確実にある。でも大きな物語の中では、皆でやらなければならぬ。その中に切実な声をどう取り込んでいくか、小さくても大切な物語を拾って、どう回収していくのか、難しいのだけれど考えていかねばならないし、考えたからといってすぐ答えがあるわけではないんだけれども。

行き着く先はどこになるのか

——コロナで言えば、貴重な若いときの時間というすごく大きな犠牲を強いられている若者もたくさんいますし、先ほどの話のように身近に亡くなった人もいますから、そういう方に共存、共生と理想論を言えるのかと。そういうすごく難しい問題ですね。

山本 まさにおっしゃるとおりで、いまの話の亡くなったおばあちゃんのようにならないように、ウイルスを撲滅しようという方がどうしても勢いがある。でもふと立ち止まってみると、その行き着く先ってどこにあるのだろうと。

——これは例外かもしれませんが、人類は天然痘を撲滅しました。あれはもし撲滅しなかったら、弱毒化して共存という道もあったのでしょうか？

山本 どのくらいの時間軸で見るとかは別にして、おそらく弱毒化の道もあったと思いますが、天然痘は根絶する条件が全て揃っていたウイルスと言っているんです。

——そんなウイルスもあるんですね。

山本 ウイルスとヒトの関係ですが、今回の新型コロナウイルスはボンとヒトの社会に入ってきてパンデミックを引き起こしながら定着しました。一方で人間社会が変わると、

変異の可能性

——昨日、ワクチンを開発製造しているモデルナ社の最高医療責任者は共同通信のインタビューで「オミクロン株の波は夏にかけて収束するだろうが、ウイルスは消えない。毎年秋に追加接種を受けて防御を高めながら共存していくことになる」と言っていました。これってつまり、当面は毎年ワクチンを打たないといけないということですが、通常生活に戻れたとしても、毎年接種の道しかないのでしょうか。イスラエルは既に4回目の接種を進めています。

山本 僕はそこはちょっとよく分からないです。一つはそういうことかもしれないですが、もう一つは製薬会社もワクチンや薬を売って利益を得ている企業ですから。そう考えると、会社のトップが毎年ワクチン必要だね、という話は、僕はストレートに医学的見解だけで判断することはできないです。つまり四つのコロナが風邪の症状で、インフルエンザよりも遥かにマイルドな症状だということであれば、毎年打つ必要があるのかどうか、ですよね。我々が何を目指しているかというところ、コロナをゼロにしたいのか、どこまでを許容するのかと考えれば、これは社会全体の問題になってきますよ。

そこから抜け落ちていくウイルスだって絶対あるはずなんです。理由は人の生活様式が変わるから。そういう見方をすると、天然痘はどこかの段階で、人間社会の中から消えて無くなるウイルスだった可能性があると思っています。それは2000年、3000年、5000年とかという時間になると思いますが、我々がしたことは、技術をもつて背中を押した、その時間を早くしたということだと思っています。——そうすると、コロナだって、科学の力でワクチンをガンガン作っていけば、撲滅できる可能性もないことはないですか？

山本 コロナ一つに限ればね。もしかしたらワクチンをガンガン打って根絶できるかもしれないけれど、要するにそこに空いた穴を何が埋めるかというと、また新しいウイルスが入れば、何のためにコロナを撲滅したのか分からないですよね。それだったらもうパンデミックになってしまっただったたら、別のウイルスへの防波堤になるという考えで、その場所は穏やかな感染症で埋めておいてあげた方がいい。そう考える方が、経済的にも生物学的にも合理的な感じがしますよね。感染症は新型コロナだけではないのですから。

——たぶん世の中の大方の気持ちは、風邪になってくれればいいと思っているのではないかと思います。

山本 既にオミクロンだって半分くらいは風邪のようなものかもしれませんが、でもかなり厳しいですよ。

——このことに関連して先生にお伺いしたかったのは、変異による弱毒性の話です。オミクロン株も変異株の一つですが、これからまた強毒性に変異をする可能性もあるのでしょうか。それとも一回弱毒化すれば、基本的にはずっとそのままだからに穏やかになっていくものなのでしょうか。それこそ本当にシグマになると、風邪級のさらにマイルドなウイルスに。

山本 ウイルスの変異は偶然的な産物なので、強毒化する可能性がないかといった「あります」。少し難しい話ですが、感染性と毒性は割と反比例する関係なんです。感染性が高くなると毒性が低くなる。毒性が低くなると感染性が高くなる。いまの新型コロナの枠の中で毒性が高くなるものが出てくれば、そして感染力が低いとすれば、ワクチンでSARSのように抑え込むことができる気がします。そういう意味では感染性が高く毒性が低くなれば、監視は必要だけれども、それ自体を過剰に恐れる必要はあまりないかもしれない。それはそれで対処することになるでしょう。新型コロナの枠の中であれば、我々、かなりの部分、免疫

を持つているんですね。で、今後感染性が高くて致死率も高いウイルスが出たとしたら、それはまた別の新型コロナウイルスになるんですよ。そうすると先ほどの話に戻ると、あまりにコロナが撲滅されてしまうと、別の新型コロナウイルスが出てくる可能性もあるかもしれません。

その時間軸は100年に一回かもしれないですが、そういう意味では新型インフルエンザの強毒版、スペイン風邪のような感染性が高く致死率も高いものが出てくるとすごく大変なことになるだろうと思います。

変異する確率の話ですが、例えば100万回に一回変異すると考えると、では100万人に感染したら、確率的にその中の一人は変異株になるのでしょうか。100万分の1と聞けば、宝くじではないですが、あまり当たりそうな確率ではないと感じる人もいるかもしれませんが、感染者の世界規模で考えれば、すぐに拡がりそうな数です。

山本 変異する確率はもつと高くて、年間30個くらい新しいウイルスの変異株が出てきてもおかしくないんです。でも変異した株が全て優勢になる、拡がるかというと、そうでもなくて、いま拡がっている方が、変異したものよりも拡がりやすい特性を持つていれば、いまのウイルスの方がずっと優勢でいられます。でも皆がいまのウイルスに免疫を持つて、変異したウイルスがそこから逃れることができ

う考えも最近出てきていますが、冬が多いですよ。

西洋と東洋の違い

——ヨーロッパのオミクロン株の対策は、もう対策いらないよ、もうマスクもいらないよとオランダやフランスを始めとして、イギリスのジョンソン首相も、一切何もやらなくいいと言いだしています。国民の傾向としてもそれを歓迎しているような報道が多いですが、コロナ対策における西洋と東洋の違いって、存在しているのでしょうか。

山本 社会的にどう考えるかです。ヨーロッパの人が全員そう思っているのではなくて、ジョンソンのやり方に批判的な人もいるし、それでいいと言う人もいます。でも全体としてみれば日本よりも、対策をしない社会なんですよ。日本よりも感染者の数は多かったのはそれが原因かもしれないし、国家が人の行動を決めるなよ、というあの種の個人主義もあるかもしれません。

——日本で考えれば、国家がここまで個人の行動を制限したというのは実は戦後初めての経験ですね。もつとも正確に言えば、日本は「自粛のお願い」という矛盾した日本語を使ったカタチの隣組的な相互監視社会になっていますが。

たら、いまのウイルスが少なくなつて、変異したウイルスに換わっていくという。

——それが置き換わるということですね。

山本 それがどのくらいの割合で起こるかはまだ分からなくて、偶然に出てくる変異より遥かに少ない置き換わり方をします。それがインフルエンザで言うところの季節性インフルエンザで、毎年ちよつとずつ違うインフルエンザが流行しますよね。で、古いウイルスに皆が免疫を持つとそのウイルスに感染しにくくなつて、そこからエスケープしたものがじわーっと拡がっていくんです。

——オミクロンもBA・1からBA・2になりました。

山本 変異していますよね。変異株が出るのも、BA・1、BA・2と置き換わるのも、別に不思議なことではなくて、すぐ大変だと騒ぐ話ではないんです。

——インフルエンザの場合だと、冬はバーツと出て拡がりますが、夏になると収まるじゃないですか。というの、ウイルスは乾燥に強いと言われていますので、湿度が上がると夏は不活発の傾向にと。でもコロナはそんなことなかったですね。2021年度の例だと湿度は関係ありませんでした。

山本 確かにデータを見てみると季節は関係ないみたいですね。実は、インフルエンザは夏にないわけではないとい

山本 日本人は大人しいですからね。そういう行動パターンを取ることにについて、そこは専門ではないので分かりませんが、明らかにアメリカやヨーロッパの人たちと東洋人の考え方は同じではないですね。

——よく言われた、例えば特定の人種、西洋人、東洋人などによつて、ウイルスの感染度や症状の違いなどはあるのでしょうか？

山本 うーん、そこは分かりません。例えばネアンデルタール人とカデニソワ人の遺伝子があると、こうなるとかこうならないとかという説もあつたんですが、それは今後分かってくると思います。

——日本人は懼りにくいと言っている人もいます。

山本 でもオミクロンを見ているとそういうのはぜんぜん関係ない(笑)。全く関係ないですよ。それでもフランスで30万人罹患とかいうレベルからすると、まだ低いのは低いんですけど。

——しかし、オミクロン株がこれだけ拡がって、まだまだピークまで数字はもつと上がると専門家に言われてはいませんが、それでも以前に比べると、緊急事態宣言が出ていないとはいえ、社会は以前ほど過度に気にすることなく動き出しているようにも思えます。

山本 社会的にどうするかという議論を始めるべきときだ

と思うんですね。この2年間、子どもや若い世代に対する影響はものすごいものだったと思います。例えば小学校でも、給食は黙食……これ給食の時間ですよ。誰とも話をせずに食べるなんて、小学生には無理があります。しかもそれは本人たちのためではないのですよ。本人たちは罹っても無症状のケースが多くて重症化しませんでした。大人の社会を守るために、子どもたちに社会防衛に参加してもらっているわけです。それによる教育とか発育、発達みたいなものを犠牲にしてもらっている。でもそれを考えている人はたぶんあまりなくて、当然の権利のようにそうさせているというのは、やつぱり、今後じわじわそのツケが回ってくるような気がしますね。だって黙ってご飯を食べられないから何しているかというと、子どもたちが話をしないようにアニメを流しているわけです。それを見ながら食べなさいと。小学生の時期のコミュニケーションの欠如は、長い期間にわたって、小さくない影響を与えるのではないかと危惧しています。

——修学旅行、運動会、文化祭などの一生思い出に残るような学校行事はのきなみ中止ですね。あぜんとしたのは、バーチャル修学旅行ということで、体育館に学年全体を集めて、みんなで訪問地とオンラインでつないだモニターを見て、ガイドの解説を聞かされているだけ、というのがあ

を遠ざけてしまった気がするんです。死とは悪いもの、というか我々は一生懸命そういうふうにしようと思ってきたのだけれど、死ぬというのは全て悪いということになってしまった。

——寿命で死ぬのは生物である以上避けられませんか。

山本 何が寿命かというのもまた難しいわけです。まだ医学がなかったときは皆、天命と言って亡くなったときに寿命だと言ってそれで納得していたのですね。

——老衰で死ぬのは大往生で良いけれど、病気で死ぬのは嫌ということでしょうか。

山本 でも老衰なんて皆、最後は病気で死ぬんです。

——え、そうなんですか？

山本 そうです。老衰なんて身体のどこかの機能が悪くなつてそれを老衰と言うんですから。それを90歳過ぎたり、100歳過ぎたりしてどこかの臓器の機能が悪くなつて亡くなるとそれをなんとなく老衰だね、と言うんです。それはある種の病気、どこかの機能不全で、機能不全を病気と呼ぶなら、皆病気で死ぬんです。元氣なまま死んでいく人はいないんです。

——なるほど、なんとなく皆、平均寿命までは生きたい、それまでに死ぬのは嫌だと、そういう感覚なんではないでしょうか。

りました。こういうことを大人たちが何の権利で子どもたちに強いるのか。高齢者の側から、自分たちのことは自分たちで気をつけるから、子どもたちの楽しみを奪うようなことはやめてくれ、という声が一切聞こえてきません。歴史人口学者のエマニュエル・トッドは「あくまでも冗談めいた比喩ですが、死者が高齢者に集中しているのは、あたかも『グローバル化のなかで優遇されてきた高齢者を裁くために、神がウイルスを送り込んだ』とみえなくもありません。」「(老人支配国家日本の危機「文春新書」と、自著の中で、現役世代に犠牲を強いて優遇される高齢者を、彼らしい独特のアイロニカルな表現で痛烈に指摘しています。いま先生がおっしゃったようなことを医者をもつと言った方がいいと思います。

山本 少なくともウイルスは敵という考え方は間違いだと思う。だけど先ほど話した「私の好きなおばあちゃんが亡くなったのよ」といううちっちゃな物語に対する答えは、共存の考えの中にはいまのところないんです。でもどこかで大きな物語の中に取り込めないかなと思うんです。

もう一つは僕も医者なんですけれど、医学って一生懸命患者が死なないように、病気が治るようにやってきて、結果、死というものを我々から遠ざけてしまった。ある種、死について語るといふか、死とは何かというのを考えるの

そしてアウトブレイクへ

——先生の本『感染症と文明』『疫病と人類』を読むと、人間のやってきたこと、それこそが今日のパンデミックを招いたとあります。

山本 人類の歴史を考えると、ヒトの活動域が広がり、野生動物のテリトリーにずかずか入り込む機会が増えました。野生動物の生息域を奪い、ウイルスがヒトに感染する確率を上げてしまったんです。野生動物の家畜化は動物に起源をもつウイルス感染症をヒト社会に持ち込みました。天然痘はウシ、麻疹はイヌ、インフルエンザは水禽、百日咳はブタあるいはイヌに起源を持つています。これらの動物は、群居性の動物で、ユーラシア大陸の広大な草原で群れをなして暮らしていたものをヒトが家畜化しました。家畜に起源をもつ病原体は、増加した人口という格好の土壌を得て、ヒト社会へ定着していったんですが、専門的な言葉で言えば、病原体は新たな「生態学的地位」を獲得したということになります。

そして狭くなった地球が、人から人へと流行を拡げました。人の往来が増え、グローバル化が進んだことが拍車をかけたのです。コロナは、ロンドンやパリ、ニューヨーク、

東京といった巨大都市で大流行しました。人口密度が高く通勤時間も長いから、そうだったのは必至でした。まだウィルスの特徴が分からなかった2020年春ごろには、緊張感はあつて当然でした。しかし、戦う相手とみなし、根絶しようとするのは違います。攻撃すれば、相手も強くなるうとする。生物が競争と協調を繰り返し、均衡点を見いだすことで自然は成り立っています。同じ場所で交わっているのではなく、互いにテリトリーを尊重しながら、それぞれの場所で生き続けるのが共存です。

人間が生物の一部である限り、新しい感染症は常に出てくるし、それは仕方ないというか、生物は常に協調と競争の中で安定を保っているんですよ。だからまったく競争相手がいないで自分たちが他の生物から被害を受けないという状況もあり得ません。ヒトだけ特異的にその地位を得ているので、だからときどきこういうことがあるとびつくりして、慌てふためくんだけど、人間が生物であることを考えると、常に協調、競争の生物の原則からは外れてはいないんですよ。そこはもう我々がどういう世界の中で生きるかという哲学の世界です。

こうした生物間競争を生態学用語で「赤の女王仮説」と呼んでいます。ルイス・キャロルの小説『鏡の国のアリス』に登場する赤の女王が発した言葉が由来ですが、生存のた

めには常に進化を続けていることが必要であるという説です。そして結論から言うと、その競争に我々人間は勝利できないんですよ。それが今日の研究者のウィルスに対する理解です。最大の理由は、ウィルスの変異、つまり進化の速度が人間の対策を何百万倍も上回るからです。

——コロナの今後の見通しとしては、最初にお伺いしたように、なんとなくこのまま収束に向かっていくんだという予測で少し安心しました。

山本 いまこうやってパンデミックが続いていますが、もういわゆるアウトブレイクみたいになっていくパンデミックの終わりの始まりだと個人的には思っています。

——アウトブレイクですか。つまり世界規模のパンデミックではなく、風土病のようなエピソードですね。(注：アウトブレイクとは、国や地域などの限定されたエリアの中で、一定期間に予想以上の頻度で疾病が発生すること。一般的に感染症に対して用いる) そうなった場合、マスク生活は……それも考え方でした。

山本 もちろん考え方。たぶんコロナが終わっても、ある一定程度の人はマスクを付け続けるんじゃないかなと思います。とくに日本やアジアでは。

でも、こんなパンデミックを経験した社会でも、意外と議論が深まらなかったような感じもしています。一番重要

なのは、我々がこのパンデミックを通してどんな社会を作っていきたいかなんですよ。でもそこに関する議論ではなく、ともかく感染を抑えろとか怖いとかいう言葉ばかりが取り沙汰されていて、終わってみると何も残らないことになりかねないという気がしています。

——コロナが一段落した後、今度は犯人捜しが始まるような気がします。

山本 何の犯人捜しが始まりますかね。——経済の落ち込みによる日本の国力の低下や、子どもたちの精神的ダメージや、若者たちの自殺などの問題が浮き彫りになるに従って、メディアが悪い、分科会が悪い、政府が悪い、自衛警察が悪いという責任のなすりあい。

山本 それは確かにあるかもしれませんね。

◇構成／編集部

(このインタビューは2022年2月1日に行われました)